The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上海博物館蔵戦国楚簡「字書」に関する情報
Author(s)	戦国楚簡研究会
Citation	中国研究集刊. 2007, 43, p. 114-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60887
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　為号（総四十三号）平成十九年六月　一一四―一一九頁

上海博物館蔵戦国楚簡「字書」に関する情報

戦国楚簡研究会

戦国楚簡研究会は、二〇〇六年九月二日から七日までの日程で、湖南省長沙市および上海において学術調査を実施した。長沙での学術調査を中心とする前稿「中国湖南省長沙学術調査報告」（『中国研究集刊』別冊（第四十一号））に続き、本稿では上海博物館において濮茅左先生からご提供いただいた、上海博物館蔵戦国楚簡「字書」に関する情報を報告する。なお、参加者・日程の概要などについては、前稿をご覧いただきたい。

我々が上海博物館を訪問したのは九月六日の午前中であり、濮先生との会見は十時から約二時間にわたって行われた。上海博物館訪問の目的は、上博楚簡の実見と現在第五冊まで刊行されている『上海博物館蔵戦国楚竹書』の今後の刊行予定に関する情報収集との二つであった。楚簡の実見は文物保護の方針により残念ながら実現しなかったが、刊行予定については最新の情報を得ることができた（前稿参照）。そして、何よりも我々を驚倒させたのは、『上海博物館蔵戦国楚竹書』とともに刊行が予定されている戦国楚簡「字書」に関する情報であった。

管見によれば、「字書」については、『上博館蔵戦国楚竹書研究』（上海書店出版社、二〇〇二年）の巻頭に収録された「馬承源先生談上博簡」が、おそらく最も早期の情報ではないかと思われる。この「馬承源先生談上博簡」は、二〇〇二年一月二十一日の午後に行われた馬承源先生（上海博物館元館長）に対する朱淵清氏のインタビューの記録であり、そこには以下のような言及がみえる。

朱：聴説上海博物館此後又購得了戰國竹簡、其中還有一種是字書。

馬：是的、那次是香港商人主動送上門來的。字書是戰國楚文字字書、有相當分量、十分重要。目前這批簡也已經完成了技術保護處理、我們已作了初步分類整理工作、内有數部書籍。《上海博物館藏戰國楚竹書》將收入前兩次入藏的楚簡共一千二百餘支、三萬五千餘字、不包括這一批。

その後の情報としては、朱淵清著・高木智見訳『中国出土文献の世界』（創文社、二〇〇六年）の巻末に付された高木氏による「出土簡帛書籍索引」第五頁「上海博楚簡」の項に、

上海博物館蔵戦国楚竹書第6～9冊
（3度にわたって収蔵された楚簡のうち2度目までのものを全9冊として整理刊行、このうち第9冊には、もっぱら断簡を収録予定）
上海博物館蔵戦国楚竹書・字書
（3度目に収蔵されたものの一部、爾雅や説文解字とは全く異なった形式の字書で、極めて豊かな内容を備える。第9冊刊行後、出版予定）

と記されている。「訳者あとがき」によれば、この情報は濮茅左先生から得られたとのことである。

これらによって、「字書」の存在はすでに知られていたわけであるが、具体的な体例や内容に関する情報は、未だもたらされていなかった。今回、濮先生からお聞きした「字書」の概要は、以下の通りである。

○「字書」は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』所収のいわゆる上博楚簡とは別のルートで入手した。

○「字書」の書写年代は、他の上博楚簡と同時期（戦国中期）と考えられる。篇題は確認されていない。簡数は数百枚という分量で、全体が完全に残っているわけではない。

○楚文字で書写され、既存の字書とは異なる独特の形式をもつ。『説文解字』に影響を与えた形跡は認められず、許慎が見た資料に「字書」は含まれていなかったと考えられる。

○部首をもち、字数や正字・仮借・転注などの通用にかかわる解説が付されており、「字書」によって、楚文字における正字と仮借字との関係が明らかとなる。例えば『汗簡』では、「字書」における仮借字の側の多くを正字としている。正字と仮借字とを分別する基準は、「字書」の分析から知られる。

○文字を学ぶ上での規範を示す性格をもち、文字と政治との密接な関係を物語る。例えば、熹平石経が今文の規範を示すように、「字書」は楚文字の規範を示してい

る。以下は推測だが、内容からみて「字書」は楚の王権が国家統一における文教政策の一環として作成したものであり、秦の統一によって抹殺されたと思われる。

これらによって、すでに「字書」の重要性は十分に察知されるわけであるが、ここでは取りあえず、濮先生の説明からうかがわれる学術上の意義を、以下の三点にまとめておきたい。

まず第一点は、中国古代史研究上の意義である。「字書」は楚文字の規範を示す性格をもち、濮先生によれば、楚の王権が統一政策のために作成したと推測されるという。

中国古代における文字政策といえば、これまでもっぱら秦の始皇帝の文字統一が有名であり、あたかも始皇帝の専売特許のごとき印象があった。しかし一方において、近年の出土文字資料の発見により、そうした見方は少しずつ修正されてきていた。例えば、秦の武王二年（前三〇九）から同四年（前三〇七）の間に書写された四川省青川県郝家坪秦墓出土の青川木牘とそのおよそ百年後に書写された始皇帝期の睡虎地秦簡との文字が、様式・形体の両面にわたって、ほとんど時代差を認め難いほどに接近していることから、秦の文字政策は始皇帝以前、遅くとも戦国中期には秦の領域内において一定の進展をみていたことが明らかとなった（拙稿「戦国簡牘文字における二様式」（『古代思想史と郭店楚簡』汲古書院、二〇〇五年））。さらに、秦簡に対して戦国中期・後期の楚簡の字体にも独自の均一性が認められることから、江村治樹氏のように楚において国家による何らかの文字統制が行われていた可能性を指摘する研究者もあった（『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』第二章 戦国・秦漢簡牘文字の変遷 五六八頁）。

「字書」は、このように推測の段階にとどまっていた楚の文字政策の存在を実証する資料と目され、これまでほとんど空白とされてきた戦国期における楚の王権の実態解明にも、重要な手懸かりを提供するであろうと思われる。

第二点は、古文字研究上の意義である。一九五一年の五里牌楚簡を嚆矢として、信陽楚簡・望山楚簡・包山楚簡・郭店楚簡・上博楚簡など、これまで数多くの楚簡が出土し、中国古代史・思想史などの諸分野で画期的な進展をもたらしている。ただし楚簡には、秦簡や漢簡に比べて数多くの難読文字が含まれており、こうした楚文字釈読の困難さは、逆に我々の使用する漢字が、始皇帝によって統一された秦の文字にもとづくものであることをあらためて強く認識させたのであった。楚簡に含まれる

難読文字のうち、字義や音が未詳であり、ときに隷定すら困難な未釈字とともに研究者を悩ませているのが通仮字の問題である。もちろん通仮字は伝存文献にも認められ、睡虎地秦簡や銀雀山漢簡・馬王堆漢墓帛書など他の出土文字資料にも多見される。しかし秦・漢の出土文字資料に見いだされる通仮字の大部分は、秦の小篆を正字とする『説文解字』の規範からそれほど大きく外れるものではなかった。ところが楚文字の場合は、そもそも正字の規範が明確でないために正字と仮借字との区別がつかず、研究者によってさまざまに提起される釈読案に対して、その妥当性を判定することが極めて困難なのである。

こうした状況に対して、「字書」は楚文字の規範として正字のみならず仮借字との通用関係を明示し、しかも数百枚という簡数から、収録字数もかなりの数に上ることが予想される。「字書」の公表が、文字学・訓詁学・音韻学などの各方面にわたって飛躍的な研究の進展をもたらし、現在、大量の未釈字や待考字をかかえて手詰まり状態にある楚文字釈読の突破口となることは想像に難くない。「この字書によって楚文字の明確な概念が決定され、楚文字研究の扉が開かれる」と我々に語った濮先生の言葉は、決して誇張された表現ではあるまい。

第三点は、中国字書史研究上の意義である。中国字書史における最も重要な著作のひとつとして『説文解字』を挙げることは、おそらく誰しも異存のないところであろう。東漢の許慎が作成した『説文解字』は、部首法という新たな体系のもとに、およそ九千字におよぶ漢字の本義を究明した、最古にして最高の水準をもつ字書として位置づけられる。こうした状況に対して、筆者は小著『説文以前小学書の研究』（創文社、二〇〇四年）において、秦の始皇帝期に作成された『蒼頡篇』から『急就篇』などの西漢小学書をへて『説文解字』にいたる説文前史の解明を試みた。小著執筆の時点では、実態を確認しうる最古の小学書は『蒼頡篇』であり、敦煌・居延漢簡や阜陽漢簡から検出された『蒼頡篇』残簡による復原作業が、説文前史解明の上で重要な位置を占めることとなったが、よもやそれから数年後に戦国期の楚簡「字書」が出現しようなどとは夢想だにしなかった。

濮先生の説明で注意されるのは、「字書」が文字学習の規範を示す性格をもつという点である。こうした性格は秦の『蒼頡篇』とそれを母体とする西漢の『急就篇』などに共通するものであり、その点からすれば「字書」も同様に課本的性格をもった小学書として位置付けられよう。ただし、両者の相違点として注目すべきは、秦系小

学書の『蒼頡篇』が正字のみからなる定型句・押韻の形式をもつのに対し、楚系小学書の「字書」には正字とともに仮借字などが掲出され、しかも通用にかかわる解説をもつという点である。両者の間になぜこのような顕著な相違が生じたかについては、「字書」の詳細な検討をまたなければならないが、現時点において秦系小学書の側の問題として注意を要するのは、『蒼頡篇』が周の史官が学童教育に用いたとされる『史籀篇』を母体とし、金文資料の分析からも西周の文字と秦の文字との間に濃厚な継承関係が認められる点である。こうした状況を踏まえれば、西周文字の伝統的規範を踏襲した秦では、すでに正字に対する認識が定着しており、通仮字の混用はそれほど深刻な問題とならなかったのではないかと推測されよう。これに対して、西周文字の規範にしたがわなかった楚では、通仮字の増出という事態が引き起こされ、あらためて正字と通仮字とを弁別するための独自の規範を示した「字書」が必要とされるに至ったのではないだろうか。同時に周辺地域に対しても、版図を拡大していく過程で楚文字の規範を浸透させる必要があり、既習得の文字と楚の規範との関係を明瞭に理解させる上で、「字書」はきわめて有効に機能したと思われる。仮にこのような推測が許されるとすれば、楚における独自の規範を提示した「字書」が、西周から秦に継承された伝統的規範になじんだ我々の目に未知の形式として映るのは、むしろ当然の現象なのかもしれない。

さらに注目すべきは、「字書」が部首をもつという点である。周知のごとく『説文解字』は「一」部に始まり「亥」部に終わる五四〇の部首からなり、その排列は字形の連繋を中心としながら部分的に意味の関連を交え、全体として文字による宇宙観を表出している。先の小著では説文前史との関連から、『説文解字』の部首法を、『蒼頡篇』や『急就篇』などに認められた同一部首字の集中化現象を理論的な方式として体系化したものと位置づけた。「字書」の部首の詳細については現段階では不明であるが、濮先生によれば「字書」は既存の字書とは異なる独特の形式をもち、それが『説文解字』に反映された形跡は認められないとのことである。しかし「字書」が部首分類をもつとすれば、直接的な影響関係の有無にかかわらず、『説文解字』の部首法の先駆的形態としてきわめて重要な位置を占めることは明らかである。また濮先生が推測するように「字書」が政策的な産物であるとすれば、楚の領域に広く流布していたと見なすことができ、たとえ直接的な関係は認められないとしても、部首分類という方式が何らかの形で漢代の古学派に伝承され『説文解字』

の部首法の成立に間接的な影響を与えた可能性についても、なお考慮の余地があるのではないかと思われる。この推測にしたがえば、許慎は秦系小学書の小篆を構造分析の基盤として正字に採用するとともに、楚系小学書の部首分類を体系化することによって『説文解字』の部首法を完成させたとの仮説も成り立つのではないだろうか。いずれにしても「字書」の公表により、中国字書史における『説文解字』の位置付けについて再考の余地が生ずることは、疑いのないところであると思われる。

以上、本稿では上海博物館蔵戦国楚簡「字書」に関する情報を報告し、併せてそこからうかがわれる学術上の意義を三点にまとめてみた。最後に貴重な情報を提供してくださった濮茅左先生にあらためて御礼を申し上げ、一日も早い公表を期待して擱筆する。

（福田哲之）